

自由・平等・博愛の精神

商法会所の設立に当たって注目すべきことがあります。

まず、出資を希望する者は、待たずとも参加でき、身分による差別を受けることがないということ。次に、出資金の大小によっても差別を受けることがないということ。この二つの点を大きく打ち出したところに、この商法会所の特色があり、画期的なところがあります。自由・平等・博愛の精神は、フランス革命の理念としてあまりにも有名ですが、栄一がこの事業を通じて実現しようとしたものもまた、このフランス革命の理念ではなかったでしょうか。

思い起こしてください。軍人であるビレット大佐と銀行家のフリュリエールが対等に話し

合っている場面から栄一が学んだものを。

静岡藩が太政官札で二十五万両余りを出資、さらに当座の運轉資金として現金一万六千両余りも出してくれました。これに加えて近郷近在の商人をはじめ一般から現金一万四千両余りと太政官札三千両余りの出資があり、これらを合わせて二十九万両余りをもって資本金としました。



▲古河市兵衛（国立国会図書館ウェブサイトから転載）

明治二年（一八六九）一月十六日、市中紺屋町にあった旧代官所

を店舗に開業、栄一はその実務を束ねる頭取役に任命されました。取扱品目は、米・茶・塩・砂糖・肥料・水油・半紙・下駄・鼻緒など。蚕卵紙や繭などは、横浜に出荷され、その売りさばきについては、栄一の親せきである「東の家」渋沢宗助や小野組の古河市兵衛などがかわりました。清水港には倉庫も設けられました。

三月には、尾高惇忠に伴われて妻の千代と長女の歌子が静岡に到着。ようやくここに親子水入らずの生活を楽しむこととなりました。

商法会所の事業が順調に推移する中、その年の十月、突然のことに、太政官から藩を通じて、栄一に上京を命じて来ました。

（文：新井慎一）

物語の手引き

栄一の起草になる『組合商法会所規則』の一部

組合加入相済み候ものは、土農商の差別無く、出金の多少にかかわらず商法に組込出金いたし、利益相計り候とも、又は金利取にて加入いたし候とも、当人勝手次第たるべく候。

『古河市兵衛』（1832年～1903年）

京都生まれの実業家。幼少期から丁稚奉公や行商に従事した後、小野組に入り生糸貿易に手腕を振るいました。

小野組破産後は独立し、東京に古河本店を開設。渋沢栄一らの資金援助で銅山を中心とした鉱山経営を行いました。鉱山王と称され、後の古河財閥の基礎を築きました。

※本コーナーの全編を通じて、登場する人物については、歴史上の人物としてその敬称を略します。また、年齢については、当時の通例に従い数え年の表記とします。

キラリ熱・中・時・間

～深谷フィルムコミッション～



強瀬誠 代表

映画で盛り立て「まちおこし」

今では珍しくなくなった市内のロケ風景。その窓口を一手に担っているのが、深谷フィルムコミッション（以下「FC」）代表の強瀬誠さん（39歳）です。

強瀬さんは、平成16年深谷シネマのオープンに携わりました。舞台あいさつに訪れた映画監督「まちを案内すること、昭和の雰囲気が残る深谷の魅力に気付いた」と言います。

まちの活性化にもつながると、平成19年にFCを発足。FCは、映画・ドラマなどを手掛ける制作会社へのロケ地の紹介や、ロケ先との調整が主な活動ですが、時には小道具やセット、ロケ弁当・炊き出し、宿泊の手配と、内容は多岐にわたります。

さまざまな制作会社からの依頼を、仲間たちの力を借りて解決していきます。最近では、地元エキストラ出演に力を入れ、制作側へ掛け合っています。

「一番のやりがいには、作り手も

エキストラも、近隣の人たちもみんな喜んでくれることです。」「と話す強瀬さんの元には、その人柄を頼りに、毎週のようにロケの話が舞い込み、年に50本を超える撮影が行われています。

10月7日～14日中には、今年で9回目を迎える「花の街ふかや映画祭」を開催。深谷にゆかりのある作品と、若手監督による自主制作映画を上映し、「映画のまち」を盛り上げます。



▲初回は応募15作、今年は158作まで増加。10月7日～14日まで、深谷は映画の熱気で包まれます（写真は昨年の様子）

「今年はおール深谷ロケのインディーズ作品が多いんですよ」と、熱のこもる言葉の中に、地元愛を強く感じました。

ありがとうの手紙



優秀賞
 小学校高学年の部
 三友コーチへ

豊里小学校6年（現豊里中学校1年）下山篤希さん
 五月二十八日（土）、突然の事だった。僕達、豊里スポーツ少年団の三友コーチ…通称みっちゃんが、病気で亡くなった。いつも、僕達の試合も練習も見守ってくれた。やさしみっちゃん、今でも信じられない。

試合でミスした時、コーチにしかられた時、そっとやさしくかたをたたいてくれた。本当にやさしさをたくさんくれたみっちゃんに、心からありがとう。僕達、がんばるよ！！みっちゃんがいつも見守っていてくれるから。

情熱農力

米生産にヘリが活躍



中村 和宏さん（34歳・本田）

県のブランド米「彩のかがやき」や「古代米」、家畜用のお米を生産する中村さん。県内では数人しかいないラジコンヘリによる農業散布の技術者です。ヘリ散布の出張先は、新潟県など県外に及びます。米どころの生産者と直接情報交換することで、生産技術を高めています。「健康でおいしい国産のお米を届けたい。また、ブランド力を付けネット販売も始めてみたい。」アイデアと若さで地元産米の将来を担います。